

授業改革学会 設立趣意書

—確かな学力を身につけ、たくましく生き抜く子どもの育成—

「いかなる教育も逆境におよぶものはない」とはディスレリーの名言である。技術革新による豊かな社会、情報化社会の進展とともに、成長する子どもをとりまく環境世界は、大きく変質を余儀なくされている。現代の子どもの生活実態や意識構造に関する多くの調査や報告書は、科学技術革命の時代を生きる子どもたちの危機的な状況を次の二つの点で明らかにしていると考えられる。一つは知的好奇心に支えられた“試みる意欲”の崩壊であり、今一つは遊び……ひいては生きがいに対する情熱の希薄化である。これらはともに、子どもが人間として成長、発達していく根元のエネルギーである“自立”の空洞化につながっていくと考えられる点で、重要な問題提起であると思われる。

「われわれが今日、科学技術革命と呼んでいる時代の動きに匹敵するほどのものは、今日まで全くなかった。……この科学技術革命は、情報の即時伝達とますます完璧化し合理化されていく計算機の発明とによって、人間の精神面をも同時に征服するに到った。これは必然的に、人間性のすべてに影響を与える現象である。」

(「未来の学習」フオール報告書)

飽食の中で、自立の魂が飢えていく現代の子どもたちの群像は、科学の所産による“人間精神の征服”を彷彿させるものであるのかも知れない。この意味で時代はまさに、子どもにとってひとつの逆境である。

しかし、技術の進展による高度産業社会は、歴史の必然である。人間はこれを回避することはできない。情報量の圧倒的な増大と多様化の進展、そして急速な変化が連続する高度情報化社会が、子どもの生きるべき地球の未来の環境である。情報公害の渦巻く社会であっても技術革新の後退の上に、21世紀の地球の活路はないのである。われわれは、この社会において、子どもの中に人間の尊厳を呼び起こし、その創造的能力を啓培しなければならない。

新しい教育は、こうした時代的課題を鮮明にし、この環境を生き抜く力をひとりひとりの子どもの人間的な能力として、正しく啓培していく必要があるといえよう。

人間の教育とは、ひっきょう自己教育である。どんなにすぐれた科学や技術も、外的な操作によって人間を“栽培”することはできない。生まれて寝たままの子が、一人で寝返りを打ち、這い這いをし、自からの力で二本足を踏みしめて三次元の世界を開こうとするあの人間創成の荘厳な序曲は、人間教育の哲理をあざやかに浮きぼりにしている。ちっぽけで無力でも、この存在は自立し、創造し、連帯し、自己を拓く主体として成長しようとする人間的希求を秘め、「自ら成ろう」として人間になるのである。教育とは、すぐれて人間の育成活動であり、「自ら成ろう」とするこの人間の魂に灯をつけ、「未完成」(A・ポルトマン)であるが故に強靱な成長へのエネルギーを、子ども自身の内発的な努力と結びつけることによって人間の尊厳への覚醒を促し、自からの人間的価値を実現していく自立と超克の過程を正しく方向づけるものでなければならない。

人間の長い歴史において、大自然との苛烈な戦いは“自ら成ろう”とする“人間の魂”を果敢に鼓舞するものであった。しかし、現代の人間をとりまく脅威は、もはや大自然ではない。この本然の魂を風化しようとする、人間の英知の所産からの挑戦である、こうした意味において現代は、人間が経験する未曾有の、それだけにもっとも恐るべき環境である。

学習の自立は、こうした時代認識において、21世紀・ラーニングソサエティー(Learning Society)を導く基本概念(Key Concept)として、教育方法論の重要なテーマになると考えられる。それは、豊かさによる人間疎外を教育的に克服する方途の追求として、未開拓の領野への挑戦になるであろう。

新時代を拓く学校教育に期待される人間形成の課題は、「自ら学ぶ態度」の育成と「自律的な生活習慣」の涵養に集約されると考えられる。「未来からの留学生」といわれる子どもたちが生き抜く21世紀は、「学ばなければならないことが、たえず再発見され、更新されつつある」学習社会である。そこでは、教授は教育になり、更にますます学習になる。

生涯学習とはひっきょう自己教育であり、学習の自立は「ひとりで学ぶ」ことから始まる。勉強嫌いが危惧される現代にあって、教育自立の鍵は、子どもを自ら学ぶ学習者としていかに蘇生させるかにかかっている。

この意味において、学習の自立をめざす授業構想の質的転換とその基本的視点を次のように考えたい。

ポイント1 教育観・授業観 として

教える側から学ぶ側へ

(1) 履修主義から修得主義へ……これは現代教育の基本的な潮流である。教育的働きかけが、被教育者としての子どもの何らかの“変化”をもたらすという意味では、その基底となる教育観によって、二様の考え方が出てくる。履修主義的教育観では“履修”という形式が優先する。“変化”が教える側の意図や期待のレベルで止どまり、“教えた”という行為の終了が教育の成立を意味することになる。しかし、“教えた”行為が子どもの側に立って、“真に何を獲得し、何が形成されたか”という修得主義的教育観からその実質が問われる時、教育の成立とは、子ども自身の“内実の変化”でなければならない。

「教えたはず…」「教えたつもり…」という教える側からの発想を転換し、学ぶ子どもの側に立って「本当に何が身についたのか…」を質的に問い返し、履修主義から修得主義への授業観の変革を図ることが大切である。

(2) あらゆる教育方法を改善する原点のエネルギーは、われわれ教師自身の意識や認識の変革である。

教育実践とは教師の人間性を通して子どもを変えていく営みである。教育の内容がいかに整備され、その方法論がどんなに究明されようとも、一つの教材が真に子どもを変え得る正しい教育力となり得るか否かは、教材を解釈し、子どもを理解する教師の人間観や教育観と深くかかわっていると考えられる。

われわれは、急速に変貌する時代の変化に柔軟に対応し、問題意識を絶えず鮮明にしつつ、自己変革を通して教育者としての人間観・教育観を不断に磨いていくことが大切である。

ポイント2 主体観として

自信と活力に満ち、自立する学習主体

(1) 学習者である子どもを尊厳の主体として遇し、一人ひとりの自己価値観と存在感を高め、自信と自尊の態度を育てることによって、自立する学習主体としての基盤を確かにする。

(2) 「…意識し、思惟し、認識する存在としての人間を刺激し、指導して、その内的な法則を、その神的なものを、意識的にまた自己の決定をもって、純粹かつ完全に表現させるようにすること、およびそのための方法や手段を提示すること、これが人間の教育である……。」

フレーベルは、子どもの中にある「内的法則……その神的なもの」を「自己の決定をもって」自己実現していく過程に人間の尊厳を認め、人間教育の本質を規定した。人間の自立とは、人間が尊厳の主体として“秘めている”この内的法則としての可能性を、自己展開していく責任者になるということである。

しかし、子どもは、自分の中にあるこうした人間としての可能性を“自ら確認し、自ら主張する”ことは絶対でない。ただ、自立し、創造し、連帯し、ことばを欲する主体として成長しようとする人間的希求を秘めているだけである。この「何も主張しないが人間に成ろうと欲求する」存在への畏敬の念を、われわれは決して忘れてはならない。

自立する主体を育てる教育の第一歩は、一人ひとりの子どもの中にあるこうした人間的希求を、誠実に汲みとることから始まるといえよう。子どもは“自ら成ろう”として、人間になるのである。どんなにすぐれた科学や技術も決して人間を栽培することはできないし、教育とは、“与えること”に尽きるのではない。

人間の本質レベルでとらえられる教育の課題は、まさにこの“自立”への支援である。それは、この“未完成”の中に内在する成長への希求とエネルギーを、子ども自身の内発的な努力と結びつけることによって、人間の尊厳への覚醒を促し、“教育によって与えられる”ものを通して、一人ひとりの子どもが自らの人間的価値を実現していく自立と超克の過程を、正しく方向づけることであると考えられる。

幼い魂の内なる知的好奇心を燃焼させ、未知への第一歩を自ら試みる主体として生きることに、子どもの真の充実がある。この充実を否定し、子どもの現在を貧しくすることは、人間としてのその将来をも貧しくする。“自ら成ろう”とする主体は、“自ら求めようとする”主体である。現代の子どもの中に萎えつつある“求める知的好奇心”に灯をつけ、「自ら学ぶ主体」としていかに立ち上がらせるかは、現代教育の切実な課題である。

ポイント 3

目的論として

新しい学力観と学び方の修得

(1) 生涯教育構想からとらえられる新しい学力観に立つ教育の課題は、生涯にわたって必要な知識や技能を完全に修得させることではなく、生涯にわたって自己教育し続ける「自学自習」の体制を確立することである。“学ぶ意志”の啓培と言語の基本的能力の育成、そして学ぶ方法の体得はその根元的条件である。

(2) 学習の自立の前提には、確かな国語の学力、基礎・基本となる言語能力が必要である。しかし、映像体験に明け暮れる現代の子どもは、ことばを操作して理解し、表現することが苦手で、「ことばで書いてあることがことばを通してわかる」のに、きわめて抵抗感が強い。

文字メディアは視覚だけに訴える、緩慢で間接的な刺激である。“記号”が与える刺激はより微弱であるだけに、読み手が強力な識別機能を駆使して働きかけない限り、文字ことばから必要な印象を得る（イメージ形成する）ことは不可能である。“読み”に要求される高度な識別能力は、つねに積極的な精神活動を前提に成立するのだといえよう。

現代の子どもに失われているのは、こうした意味での積極的な精神力である。

(3) 基本的な言語能力の育成は、主体的・能動的な課題解決意欲に支えられて、始めて実効性をもつことになる。効率的な情報収集に慣れて、“探究の喜び”が枯渇しつつある子どもに精神的な緊張感の持続を促すためには、“しつけ”や“訓練”による継続的な習慣形成が必要である。現代における“国語学力”論の中に、“言語への情熱的態度”も重要な要因として規定し、文字という誘引力の乏しいメディアに対しても、自主的に働きかけていく読み・書きの基本姿勢を確立していく必要がある。

ポイント4

内容論として

指導内容の精選と重点化

(1) 学習の一まとまりである単元の展開構想は、“教師中心の一時間の授業をいかに巧みに、はなやかに展開・処理するか”の発想から、学習者主体の内容構成へと転換が必要である。学習者の確かな学力定着や自発的な働きかけを促す立場から構想される単元構想の課題は、教科書だけに頼る教科書カリキュラムの克服である。それは、能力育成に最適な教材群を多面的に収集し、学習過程との有機的な関連を図りながら構造的に配列し、全体的な指導成果を高めていく、1つの総合でなければならない。

(2) 主たる教材としての教科書教材から、主軸となる教材を中核教材として位置付け、目標との有機的関連において、子どもの側に立った学習内容の分析、統合、構造化を行う。重点的に体系化した内容を能力育成の観点から、学習活動として組織化することによって「転移力のある学力」の育成を図る。

(3) 学ぶ立場からの発想において、情報媒体としては最も子どもの抵抗が高い言語教材に意欲的に立ち向かわせるには、文章の状況認識や具体的なイメージ形成を助長できる多様なメディアが必要である。

一単元一教材の発想を転換し、中核教材を中心に目標達成に必要な多面的な補助教材や多様なメディアを位置づけ、総合的な単元構成を行う。

ポイント5

方法論として

指導方法の創意・工夫

(1) 「……児童の理解如何という事よりも、教授はかくあるべきものとの余の理解に合致するを第一と考えた。予備・提示・比較・総括・応用の五段階を巧みに踏んで、自己の満足感を得ようと努めた。而して之が最善の教授であると考えていた。この頃になって、『教授は児童が自己の日常生活を解釈し、識見を高めようとする学習の態度を確立するのが第一義。』と考え始めた。即ち教授には教術も大切であり、教材研究も大切である。しかし如何に五段の段階をうまく踏んでも、教材の要求に合致しても、それが児童の日常生活を覚醒し、発動的学習態度の確立に無効であったら、教授は全く無意義である。……」
(芦田恵之助「読方教授」一緒言)

これは、名著「読方教授」における70年前の提言である。ここでは、指導方法（指導過程・指導内容・指導法・評価）の問題は、教材と教師との関係ではなく、教材と学習者との関連においてこそ生きて作用する方途になり得ること、また、教材の質と学習者の状況との関連がない方法論は、形式的・固定的な類型に落ち入りやすいことが、すでに深く洞察されている。